

# コンバージョンされた美術館に関する研究 改修経緯と展示空間評価の考察を通して

5228 原友里恵

指導教員 助教 佐藤慎也

## 1. 序論

### 1-1. 研究の背景と目的

建築において、コンバージョンという概念が急速に広まり始めたのはバブル崩壊後であるが、1990年代後半以降からは概念だけではなく、現実の事例が国内でも数多く見られるようになった。その有効性としては、環境負荷の軽減、歴史的建造物の保存や再生等がよく知られているが、他にも様々な面での有効性があることが推測される。

日本国内のコンバージョンの事例に関して、コンバージョン後の新たな用途は、展示空間が最も多い\*1。その要因としては、改修工事が比較的楽、アーティストの作品の発表の場が十分ではない、以前に増して世間が芸術文化に目を向けてきていること等があげられる。したがって、今後もコンバージョンによって生まれる展示空間は着実に増えていくと考えられる。

一般の美術館建築における「ホワイトキューブ」と呼ばれる無機質で真っ白な展示空間では、作品をどのように配置することも可能であり、照明や空調等の設備もすべて整い、当然そうした場ではどんな作品も常に主役になれる。しかし、コンバージョンによって生まれた美術館は、そういった展示空間とは異なる空間特性を持つ。本研究では、その展示空間の特性とその要因を明らかにし、コンバージョンの新たな有効性を見出す。

### 1-2. 既往研究

コンバージョンに関する研究、美術館や博物館等の展示施設に関する研究はこれまでも多く見られるが、本研究が対象としている美術館のコンバージョンに至る経緯やその展示空間に対する運営側の評価について記述している既往研究は見られない。しかしながら、施設の内側からの思考には外からは分かり得ない実態があるため、このテーマを研究することは、これから行われる同類の事例にとって意義があると考えられる。

## 2. 研究の概要

### 2-1. 研究方法

はじめに、各研究対象の背景、コンバージョンに至る経緯、改修内容を雑誌又は美術館から提供された資料を元に文献調査を行なう。この調査によりコンバージョンの改修経緯を把握し、現状を明らかにする。次に、美術館及び展示空間、展示内容についてアンケート調査又はヒアリング調査を行う。アンケート調査については、電子メール、手紙郵送、ファックスによって各美術館に問い合わせた。また、

ヒアリング調査については、ヒアリングが可能であった施設(2件)に対して行った。これにより、コンバージョンされた美術館の展示空間の評価を明らかにする。最後に2つの調査から、これまでの美術館へのコンバージョンの傾向と、それによって生み出された展示空間の特性の要因を考察する。

### 2-2. 研究対象

研究対象は美術館へコンバージョンされた国内の施設全てとする。選定については、インターネットサイト「artnavi.jp<sup>\*2</sup>」又は「全国美術館ガイド<sup>\*3</sup>」に掲載されている美術館で、ホームページ等から明らかにコンバージョンが行われたことが分かる施設を選定する。研究対象となった施設は88件である。

## 3. コンバージョンの経緯

### 3-1. 旧用途と改修年・竣工年

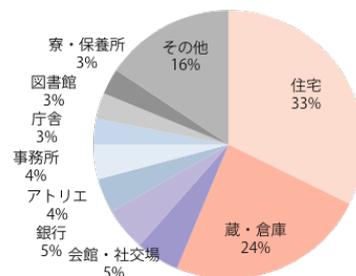


図1 旧用途の割合

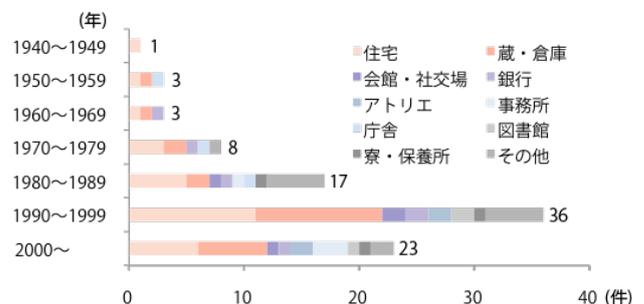


図2 旧用途と改修年

旧用途を見ると、「住宅」と「蔵・倉庫」の2つが圧倒的に多い。その次に「会館・社交場(クラブ施設等)」「銀行」が続く。上位は公共性の低いもの、その他は比較的公共性の高いものと区別することができる。これは、美術館に限らず、コンバージョン建築全体の旧用途の分布とほぼ一致した結果である。

旧用途を改修の年代別に分けた結果、美術館へのコンバージョンは着実に増えていることがわかる。特に70年代から80年代、80年代から90年代にかけての増加は急激なものである。70年代までは、着

実に事例数を増やしながらかも、旧用途に関しては「住宅」「蔵・倉庫」「銀行」「アトリエ」に限られている。80年代に入り、事例数が急増すると同時に、旧用途の種類も一気に広がりを見せている。(図1、図2)

また、竣工から何年後に改修が行われているかを調べると、ほとんどの建築が20～100年未満で、最も多いのが20～40年後であった。100年を超すと大きく減少する。(図3)住宅と蔵・倉庫のみに関してみると、「住宅」は20年以上60年未満での改修が多い。「蔵・倉庫」は80年以上100年未満が最も多いが、比較的どの年代にも均一に広がっている。(図4)

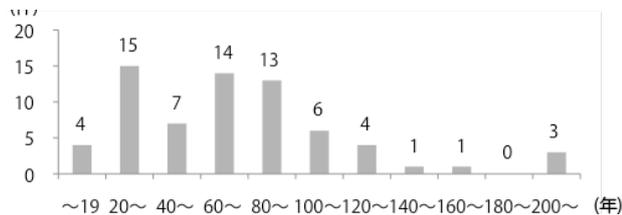


図3 竣工から改修までの年数

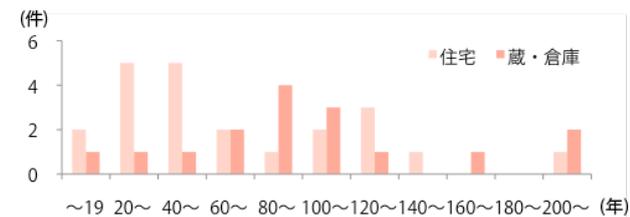


図4 竣工から改修までの年数 (住宅/蔵・倉庫)

### 3-2. コンバージョンに至るまで

#### (1) 旧用途を終えた原因

旧用途を終えた原因としては、主に「旧用途の移転」「旧用途の規模縮小又は廃業」「建物の持ち主死去」が挙げられた。また「旧用途の移転」に関しては、「旧用途の機能に対し建物が手狭になる」「建物の老朽化」といった理由であった。

#### (2) 旧用途を終えてから美術館になるまで

##### ① 建物を活用した要因

建物を活用した要因としては、「建物の保存・再生」を目的とするものが多く、国・都道府県・市町村から文化財登録等を受け保存されているものは88件中23件、コンバージョンの経緯調査の対象である41件中では16件あった。つまり残りの25件については、企業や地域住民による保存運動が中心となっている。

##### ② 新用途として美術館が選ばれた要因

市町村や企業が「芸術文化施設により社会貢献をする」というものが最も多い。その中には、作家やその遺族によって美術作品を寄贈されたことをきっかけとするものも含まれる。また、「社会貢献」と共に「企業イメージの向上」を狙ったものもある。他には、「美術館の展示室の不足」、「市民が地元出身作家の作品散逸を防ごうと行動を起こす」、「個人や企業が美術館をつくりたい」というものがある。(図5)

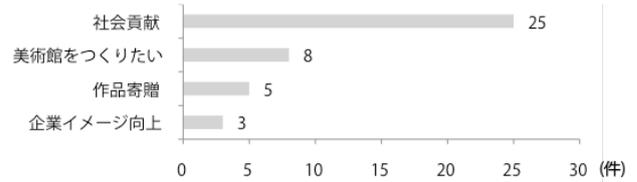


図5 新用途が美術館となった理由

### 3-3. 改修内容

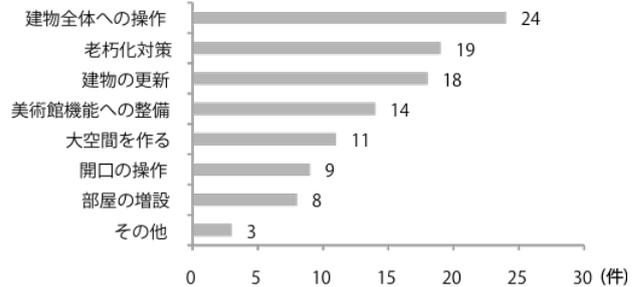


図6 改修内容

改修内容としては、増築、減築、複数の建物を繋ぐ等の「建物全体への操作」、老朽化部分の補修、構造補強等の「老朽化対策」、塗装、床・壁等の仕上げ変更、敷地内整備等の「建物の更新」が多くみられた。これらは何れも、あらゆるコンバージョンで必要とされる行為である。次に多く行われていることは、設備の更新、既存物の撤去等の「美術館機能への整備」、床の撤去、壁の撤去等の「大空間の確保」、床の新設、壁・柱の新設等の「部屋の増設」、開口を設ける・なくす、搬入口確保等の「開口の操作」である。これらは、展示空間をつくるために必要な行為である。(図6)

また、改修内容を旧用途ごとに分析する。「増築」「床・壁等の仕上げの変更」「老朽化部分の補強」「構造補強」「壁の撤去」は旧用途に関わらず、比較的多くの施設で行われている行為である。特に「増築」に関しては、比較的規模の小さい住宅や蔵・倉庫に多くみられる。また、旧用途が図書館、庁舎等の場合、規模が大きいためか他より多い種類の改修を行っている。倉庫に関しても、規模は小さいものの均質空間を持っていて展示空間に向いているように思われるが、基本的に人がいる空間ではなく物が置かれる空間であったためか、様々な改修を必要としている。「大空間の確保」のための改修は、銀行、事務所、工場、裁判所ではいっさい行われていない。また、工場は空間が大きすぎるためか、部屋を新設している事例があった。旧用途が住宅の場合、「老朽化部分の補強」「床壁等の素材の変更」「増築」をほとんどの施設で行っている。これが、私的な住宅を公的な美術館に変える必須事項だといえる。

### 3-4. 考察

改修年の分布に関しては、社会の動きがそのまま結果に表れたと言える。旧用途の分布について、住宅や蔵・倉庫が多くみられたのは、建物の数が圧倒的に多いためだと考えられる。さらに、住宅の場合、

持ち主が個人であるため、使われなくなる周期が比較的早いというのも要因の1つだと言える。

改修内容は建物の竣工年によらず、旧用途によって違いが出てくることが分かった。それにより、それぞれの旧用途が要求していた空間構成が、展示空間へのコンバージョンの向き不向きを決めているといえる。しかし、全体としては、改修時にあまり手を加えずに、既存建築を最大限に生かした改修が行われている。

また、展示施設の空間構成には柔軟性があり、展示空間への改修手法の必須事項は決して多くないため、コンバージョン後の新用途として美術館を採用することが多くみられると考えられる。

#### 4. 展示空間の評価

##### 4-1. アンケート・ヒアリング調査

アンケート調査又ヒアリング調査を各美術館の運営者に対して行った。アンケートについては87通のうち27通の回答があった(回答率31%)。建物又は展示空間の特徴・魅力、利点・欠点、一般の利用者からの反響、展示空間は展示作品を選ぶか否か等について質問を行った。

##### 4-2. 建物又は展示空間の特徴・魅力

回答内容	件数
改修前の建物の装飾や建築技術、空間	10
改修前の建物の雰囲気が残っている	10
建物と展示品との調和	7
建物そのものが展示作品である	4
古さから落ち着く／懐かしい／趣がある	3
新旧の調和	3
その他	3

表1 アンケート回答 特徴・魅力

装飾等の物理的に見えるものを指すのか、雰囲気等の感覚的なものを指すのかに違いは生じたが、いずれも元の建物が持っていた特徴・魅力を、コンバージョン後の美術館においても特徴・魅力と捉える回答がほとんどであった。(表1)

##### 4-3. 建物又は展示空間の利点・欠点

利点については「特徴・魅力」と類似する回答が多数見られ、本来の展示空間としては受け入れられない建物の主張を肯定的に捉えていることがわかる。既存建物の空間構成が展示に活かされるといった回答もあり、「空間が大きく、大型作品の展示が可能」「展示室、展示壁面が多い」がそれであるが、前者の回答は比較的大きな空間を持つ銀行、水力発電所、樽貯蔵庫、後者は比較的室数の多い図書館、社員寮が旧用途である。また、旧用途が住宅の美術館の回答で「工芸品等をそのように置かれていたであろう状態で展示できる」といったものもある。「立地が良い」とは、旧用途が郵便局や銀行であった美術館の回答であり、街の中心部に設置された建物を活用し

たために、良好な立地に芸術文化の拠点を置くことができたようだ。

欠点については、回答のほとんどが設備面と老朽化に関するものであった。そして、それを回避するための改修さえ、貴重な建物、古い構造の建物であるために制限されてしまうというのも事実のようだ。また、「空間的に展示内容に制限がある」「動線が悪い」等は、旧用途の影響を大いに受けている結果だろう。バックヤードが十分に確保できないといった回答も多数あった。(表2)

回答内容		件数
利点	雰囲気が良い	5
	展示室、展示壁面が多い	4
	建物を見えもらえる	4
	展示作品と雰囲気が合う	4
	空間が大きく、大型作品の展示が可能	3
	立地が良い	2
	その他	3
欠点	設備(照明、空調等)が十分ではない	10
	建物の老朽化	6
	空間的に展示内容に制限がある	6
	貴重な建築のため改修に制限がある	6
	作品の搬入、移動、保管等が不便	5
	バリアフリーが不十分	5
	動線が悪い	3
	メンテナンスに苦労する	3
	立地が悪い	2
	その他	3

表2 アンケート回答 利点・欠点

##### 4-4. 一般の利用者からの反響

運営側同様、一般の利用者も既存建築を利用した展示空間に魅力を感じ、展示作品と共に建物を観ていく場合が多いようである。しかし、苦言も多く、「バリアフリーの不備」「照明等の内装が不十分」「場所が分かりにくい」「外観で美術館だと気付けない」がそれである。

##### 4-5. 展示空間は展示作品を選ぶか

「選ぶ」13件、「選ばない」6件という結果であった。「選ぶ」と回答した理由について、不向きと思われる作品の種類ごとに以下に記す。( )内は回答を得た施設の旧用途である。

- ・大型作品(住宅、蔵、事務所、庁舎、寮)  
空間が狭い。搬入・移動が困難。
- ・絵画/版画/書等(住宅、蔵、社交場、銀行、工場)  
展示壁面が少ない。石の壁がむき出し。  
空調が十分でないため温湿度の影響を受ける。  
貴重な建物のため壁に釘打ちができない。
- ・彫刻/現代美術(郵便局)  
展示室が自然光を妨げるものである。
- ・紙を用いた作品(工場)  
直射日光が差し込み、作品が変色する。

「選ぶ」理由としては、雰囲気等ではなく設備や空間の大きさ等の物理的要因による場合が多い。また、「選ばない」の回答は蔵・倉庫が半数を占めた。

#### 4-6. 展示内容

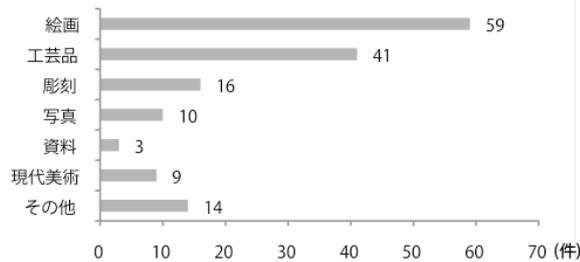


図7 竣工年と展示内容

展示内容としては、「絵画」「工芸品」が特に多いことがわかる。「工芸品」については、展示空間の旧用途の面影や古さの中にある歴史と「工芸品」が調和する、または作品の展示に関して物理的な不都合が生じないためだと思われる。また「現代美術」が非常に少ないのは、「作品に支障をきたさない背景」「大空間」「積載荷重に耐える床」「均質な光」\*4等、展示に対する制約が多いためからだろう。

竣工年との関係を見ると、「絵画」「工芸品」は建物の古さに関わらず展示されている。そして、古い建築の方が展示作品の種類を限定させていることがわかる。(図7)

#### 4-7. 考察

いずれの美術館も、展示空間の特徴・魅力を既存建築あつてのものとして捉えている。本来の展示空間としてはあまり受け入れられない建物の主張を肯定的に捉え、それを展示空間の特徴・魅力と認めている。それは「コンバージョン」という用途の変化のみならず、「時間の経過」による建物の変化からも発生しているといえる。そして、作品の展示に建物の特性を考慮することは必要だが、多くの場合、その運営側の努力は一般の利用者を満足させる結果となっている。よって、コンバージョンされた美術館では、建物自体が主張をしている展示空間と美術作品は共存可能であり、建物、美術作品の他に、その両者の融合という3つ目の新たな作品を生み出す可能性を秘めているといえる。ただし、ある観点から良い評価が得られたとしても、一方で展示空間・展示施設としての機能を十分に果たすことができているのかというと、困難な場合が多い現状も確認できた。特に登録文化財等の歴史的・意匠的・空間的価値のある建物の改修では、十分な改修が許されず、展示空間としての不都合が多い。

また、展示作品の種類に関して、現状では古い建物にはそれと調和するような作品(絵画、工芸品等)が選ばれ展示される傾向がみられる。一方、現代美術等の展示による空間と作品との融合も、多くの可能性を秘めていると考えられるが、そのような展示を行っている美術館は現状では多くないといえる。

## 5. 結論

改修の方針として「あまり手を加えない」といった傾向がみられたが、それが結果として、展示空間の特徴・魅力や利点に繋がるということが明らかとなった。

ホワイトキューブの展示空間が、美術作品の種類を選ぶことなく何にも邪魔されない鑑賞を可能としている一方で、コンバージョンされた美術館の展示空間では、展示空間に適した作品選びと展示方法を行い、空間と作品を同時に観賞し、その両者の融合も楽しむことを可能としている。そういった面では、既存建物を展示空間にすることは非常に有効だと言える。しかし、建物の老朽化や設備面では、運営側、一般の利用者共に不便を感じている。

また、美術館へのコンバージョンに向いていると思われる建物を1つあげるならば、共に不特定多数の人の出入りがある公共施設であり、空間構成の類似や設備が整っている点で、旧用途が図書館の建物であると言える。しかし、どのような旧用途、歴史をもつ建物でも、それぞれが個性を活かすことで、他にはない魅力をもつ美術館へと生まれ変わっている。

コンバージョン美術館が存在しているのは、1. コンバージョン可能な建物の存在、2. 建物の保存を提唱する人の存在、3. そこを活用・運営する人の存在が要因である。また、ここまで述べてきた、美術館にコンバージョンされた展示空間の魅力とは、旧用途の面影、建物が積み重ねてきた歴史、そこに美術作品が置かれることにより発生する空間と作品の融合であると言える。これらの要因によって、1度役割を失った建物が再生され、今日の時代に生きた空間の使われ方がなされているといえるのである。

#### 謝辞

本研究では、調査協力・資料提供をして下さった美術館の皆様には多大なる協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

#### 【参考文献・注釈】

- 1) 武田美由紀, 若色峰郎, 渡辺富雄: 展示空間に転用された登録文化財の事例調査, 日本建築学会大会学術講演梗概集(東北), 2000. 9
- 2) 渡辺真由美, 山畑信博: 既存建築のサスティナブル・デザインとコンバージョンに関する研究, 日本建築学会東北支部研究報告会, 2004. 6
- 3) 和田優輝, 古谷誠章: 改修・転用によって展示空間化された事例にみる再生デザイン研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集(東北), 2000. 9
- 4) 佐藤悠, 真鍋恒博: 用途変更における建物用途間の特性の差異に関する考察, 日本建築学会大会学術講演梗概集(九州), 2007. 8

\*1 渡辺真由美, 山畑信博: 既存建築とサスティナブル・デザインとコンバージョンに関する研究, 日本建築学会東北支部研究報告会 2004. 6, 図2 コンバージョン後の機能より。

\*2 artnavi.jp, <http://www.artnavi.jp/>

\*3 全国美術館会議編: 全国美術館ガイド, 美術出版社 2006. 12

\*4 和田優輝, 古谷誠章: 改修・転用によって展示空間化された事例にみる再生デザイン研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集(東北), 2000. 9, 5.6. 展示内容 現代美術の要求より。